
新・二つの世界！？ 目指せ!!オッパ...

rahotu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新・二つの世界！？ 目指せ！！オツパ・・・

【Nコード】

N3922Q

【作者名】

rahotu

【あらすじ】

変態でチートな男がネギま！の世界で原作無視や無茶苦茶するは、果ては国家建設まで行うのはチート転生ストーリー！。

駄文作者がお送りする変な物語をどうぞ。

作者の都合で申し訳ありませんが打ち切らせていただきます。皆様には大変ご迷惑をおかけします。

転生！？（前書き）

この作品はいぜん投稿させていただいた「二つの世界」が間違つて消してしまったために再構成しなおして新たな別のストーリーとして書いたものですのでお気をつけ下さい。

転生！？

オレこと大穴熊 辰人は死んだ。

テンプレ乙な死に方で、病気にかかって合併症を引き起こしてあっさり死んだ。

でだ其れはいいとして目の前にすごく事務的な笑顔をした姉ちゃんが居て（しかも巨乳）でおれに一枚の紙を出しているのだ。

「ここは何処だ」とか「俺は死んだはずでは」とか「あんた誰だ？」とか「すりーさいずいくつ？」とかいろいろと聞きたかったが其れをぐつと我慢して一言。

「テンプレですか？」と聞くと。

「はい。テンプレです」と笑顔で返しやがった。

首を傾げて笑顔を見せるとき揺れたお胸は勿論見逃さなかったぜ！。とにかく渡された紙に目を通していく。表紙に「転生希望書」と書いてあり、その後目を通していくと書類の書き方だとか此れの意味だとか全部書いてあった。

でだ、目の前の巨乳の姉ちゃんに目を向けるとあちらも目で「書かれたとおりにして下さい。」と伝えてきた。

取り合えず重要なことは後回しにして目の前の書類を片付けることにする。

よし、全部終わった。何を書いたかは秘密だ。てかプライバシーのうんちゃらかんチャラだ。

で、出来上がった紙を巨乳の姉ちゃんに渡すと其れを短くうなずきながら確認をして其れから俺のほうを向くと。

「では、大穴熊 辰人様 書類のほうに不備は御座いませんで受理され次第次の人生がスタートします。」

といって巨乳の姉ちゃんは座っていた椅子から立ち書類を持ってどこかへ行こうとした。

オレはあわてて立ち上がって「あのつ。」と声をかけた。

巨乳の姉ちゃんは訝しがりながら「何か？」と聞いた。

オレは少し深呼吸をしてから彼女に「また会えますか？」と聞く。何故そうしたか理由は分からないがただあの乳はそう滅多にお目に懸かれる物ではないのでそういった意味で惜しいと思ったのだろう。

そうすると女性は少し瞬時してから「機会があればまた。」と云ってからどこかえ消えてしまった。

少しするとオレは急速な眠気に襲われた。

色々あったためだろうかそれともあの書類とやらが受理されたためだろうか。とにかくオレは暫しの眠りについた。

転生！？（後書き）

この作品ではぎりぎりR・17・9を目指した表現が御座いますのでご注意ください（笑）

目覚めた場所は！？（前書き）

「巨乳とあまり連呼すると読者から引かれるぞ」と友達に言われま
した。

だが、引かぬ媚びぬ省みぬー！

と返したら。「変態」と言われました。

目覚めた場所は！？

あれから暫くして目が覚めた。

目が覚めたはいいが．．．．此処何処？

なーんも無い無人の荒野に唯一人ぽつつんといった。

ふと空を見上げてみると一枚の紙がひらひらと落ちてきた。

拾ってみると　P S ・貴方の転生した世界は魔法使い先生ネギマ！です。

と綺麗な文字で書かれていた。　恐らくあの巨乳の姉ちゃんだろう
か。いや、絶対そうだ。てかそうであって欲しい。

ん、わざわざこの紙を送ってきたって事は此れはひよっとすると．．
．ぐふっふふふいい事あるかもしれないな。

取り合えず本当になーんも無いので適当に能力の確認でもすつか。
そうと決まればまず何をしようか。

「うん。」と首をひねって適当に腕を振ってみた。

地面が割れた。

次に思いっきり腕を振ってみた。

竜巻と真空刃が同時に出た。

「よし、騎士としての能力は大体大丈夫だな。んで次あつと。」そう言ってから手のひらを何も無い空間に突き出すと。

手から電撃が出た。

「こつちも良いようだな。」そう言っただけを見渡すと。大地が所々割れて砕けていて、ついでに表面が電撃で黒く焼け爛れていた。

改めて自分が得た能力がカラ恐ろしくなった。

やっぱりファイブスターはやり過ぎたかな。でも原作がなかなか始まらないのか他の二次の転生者とか毎回毎回同じ能力選ぶす「ウオツホン」あぶねえあぶねえ早速読者からつるし上げ食らう所だった。

と、兎に角まずはどうか他の人を探そう、オレ一人だと気が滅入るし尚且つ此処がああネギ魔の世界だとしたらきつとおんにやのこ、みんな綺麗なんだろうな。（それと巨乳でありますように）

いかん、「性欲をもてあます。」と某蛇男風に言っただけからオレは適当に走り出した。

目覚めた場所は！？（後書き）

感想が欲しいです。

何でも良いです。

作者のネタが尽きないうちに多くの人に感想がもらえると新たなネタが思いつきますので。

主人公&世界観設定（前書き）

需要が無いけど転生もので在りがちな設定を載せます。

主人公&世界観設定

おおあなぐま
大穴熊

たつひと
辰人

転生後の設定

名前 バッシュ・ダン・グローゼン

年齢 二十歳前半（F・S・S設定で寿命は三百年近くもある）

身長 二メートル以上

体重 百キロ以上

能力 F・S・Sでの最強の（ログナーを除く）騎士の力。

超帝国の”炎の女皇帝”のダイバーフォース能力。つまり

人類最強

全ての剣聖剣技、天位剣技、相手の剣技を見るだけで習得出来る。

MH召還能力 ありとあらゆる所でMHを呼び出すことが可能。

A・D世紀、星団暦全ての知識。マイトやマイスターなんか目じゃない。

性格

転生前は普通の変態だったが転生後はどうしようもない変態になった。エロゲの主人公の如く女の胸を追いかけたり、幼女や孤児の面

倒見たり養子にしたり援助したりしてその実自分好みの色に染め上げたりする鬼畜。美女や少女を徹底的に調教するのも好きだが逆に罵られたり虐げられたりするのもよかつたりする変態。てか巨乳にされるならなんだって大好物な既に終わっている人。

貧乳も割りと好き。というか貧乳から育てて微乳、美乳、巨乳にするのが趣味。

多分ダグラス・カイエンをダサくして節操の無い女好きにしたらこんなになったという人物。

だが、自分の力がこの世界にはあまりにも過ぎたものと自覚しているため常に”ハイブレイン”で力をセーブしている。又自分の力がこの世界では振るわれないことを願っておりそのため原作には”直接”介入するつもりは無いようだ。

だが自分の大切なもののためには躊躇わず力を解放する。（主に将来有望な幼女とか少女とか美乳とか巨乳とか・・・てか女の子のためなら力を解放します。原作組みは除外。笑）

基本ムツリ、中身エロス、裏の顔は騎士としての孤独、その本性はどうしようもない変態。

武器 太刀（無名）

ヒビイロカネ、ミスリル、ダマスカス、オリハルコン、玉鋼、各種龍玉、etc等を組み合わせで作った太刀で本家のメトロ・テラ・クロムの太刀よりも凄い。（壊園剣よりは劣る）この世にある物なら何でも斬れて尚且つ折れない、磨耗しない、錆びない、などの特典がついている。つまり唯の一般人が天下を取れる神刀である。この剣で全力出すと多分次元や下手すると神くらいは斬れます。後々主人公の子孫が此れを受け継いでいく。

フィフェール・ダン・グローゼン

バツシュの娘、エイリスの後を継ぎ、グローゼン王国とA・D・Kを収める若き皇帝。

しかし、毎回毎回、高祖が起こす女性問題の後処理をやらされ、また彼自身もこんな身内を持つてしまったために女性との出会いが少ない。その為気兼ね無く付き合ってくれる十歳以下の子供が唯一の彼の慰めであるため後天的真性のロリコンになってしまった。

ちなみに、今彼の回りのいる女中や秘書、メイドは全て孤児院から引き取った十歳以下の女の子を一から育て、好みやシチュエーション、コスプレなどに合わせて調・教育した者達で固められ、ある種の後宮と化している。

自身はロリコンやシヨタコンを否定しているが、度々孤児院に御忍びで訪問したり、好みの女の子に「おにいちゃん」や「兄さん」や「お兄様」と呼ばせて悦に入っている姿が度々目撃されている。

??? まだ出てこないがこの作品最強ヒロインとだけ言っておく。
本気出すとラキシスより強い、てか創造神を軽く超える。世界意思、
地球意思、宇宙意思、次元意思、この世のあらゆるものを越えて君
臨する。

主人公&世界観設定（後書き）

随時更新して行きたいと思っていますのでご確認ください。

到着！？（前書き）

な、なーんか別の息抜きで書いた小説が勢いあまって書き過ぎたので久しぶりに更新します。

到着！？

あれからどれ位だろう。

取り合えず大きな町を目指して適当に走った。

流石は騎士の体。時速140kmで走っても全然疲れないぜ。

でも何日も飲まず食わずで走り続けることはきついので（不可能ではないが精神的にきつい）適当に狩をしながら人里を目指した。

最初は狩といっても適当に薬草や茸等を採取して食べた。

でも其の肉が恋しくなつて魚を獲るようになってその後は自然と森に住む猪やら熊やら蛙やら火を吐く蜥蜴やらついでに雷を操る大きな犬？にもであった。

勿論部位破壊して落し物も拾って剥ぎ取りもしてついでに背中から光る昆虫もめつけたのでそれも貰う事にした。

肉は正直食えた物ではなかったが、やっぱり一番上手いのは生で其のままかぶりつく事だ。

あれなんか言ってから目から汗が出てきた。おれこの世界に何しに
来たんだろっ？

ハンターとなつてありとあらゆるモンスターを狩猟し、気配を殺し
て物陰に潜み時にダンボールで敵を欺く蛇になつた気分だ。

そんな人間として色々とアウトなことをやっているとな森が開けて目
の前に大きな壁に囲まれた町が見えてきた。しかもなんかヒトが箒
に跨つて空飛んでるし。

薄々とは感づいてはいたがここは原作の「魔法世界」らしい。

検問所を何とかすり抜け町に入ると其処は別世界だつた。

町を行きかう人々で道は溢れ時々ヒトではないものも見かける。

そういったものは猫耳だつたり犬耳だつたりとケモナーが多くそ
の次に額から角を生やした者も見かけた。

はっきりに言おう。ここはオレの厨二心を刺激するもので溢れてい

た。

一目で分かるヒトではないもの達、甲冑を身にまとう騎士、フードを羽織り手には大きな杖を持つ者。

露天では様々なものが売られていて宝石の様にキラキラした石。女性に着飾るアクセサリや衣服などが彼方此方で売られていた。

そして何よりも街中に溢れる肉の焼ける香ばしい臭い。

何日ぶりにかく文明の臭いにオレは興奮していた。

早速色々を見て回りたいと思ったがそれには少しお腹のむしをどうにかしなければ成らなかった。

しかし金が無いし売れるものといったら燻製にした肉と例の犬の材料だけだ。

駄目もとでとりあえず質屋を探すことにした。

結果……。当面所かこれからの旅が心配なくなるくらい金になった。

質屋いわく燻製は売れたものではないが例の犬の素材が素晴らしいらしい。

上位だがG級だか言っているが俺にはほとんど意味が理解できなかった。

で、オレが幾らになるかと聞くと質屋が此れを何処で手に入れたかとしてこく聞くもんで適当にダイバーパワーで記憶を飛ばしてついでにぼったくろうとした事が分かったのできちんと O H A N A S H I したら分かってくれた。

とりあえず宿をとることにした。今のオレはちよつとした小金もちなので泊まるところは確りとして信用のある店を選んだ。

ちようどいい雰囲気のお店があつたので其処に宿を取ってついでにお湯ももらって（風呂が無かったので 畜生！）体の垢を落として埃を払い身綺麗にしてから町を散策することにした。

適当にそこらへんで売っていた物をほお張りながら道行く人々を観察した。背が高いことも人々を見回すことに便利だったが一つ問題がある。

オレの身長はこの世界にきて変わったのか前よりも二周り程大きく
なってはつきり言って目立つので、周りの視線がウザイ。

でそんな表情を表に出すわけにもいかなかったので大きめのローブ
を買った。

ちょうど儀式用だか何だであまったものが手に入ったので割高だが
それでもいいものが買えた。

頭から踵まですっぽりと覆う特大のローブが手に入った。

だが今度は逆にこのローブのせいで怪しさが増したのか周りのヒト
が距離を置いて行き来するようになったので其処がネックだった。

兎に角オレはこのローブが気に入ったので身に着けることにしたし
流石に街中ではフードを取るが外では雨や風除けにもなり大きいの
で簡易のテント代わりにもなるこのローブは重宝すると思ったから
だ。

あと露天以外にも店に入って旅に必要な道具をそろえた。

残念ながら騎士の大柄な体系に合う服は早々見付からなかったので
諦めたが、それでも一端の冒険者風にはなった。

それと武器も探そうと思ったがどれもこれも軽く振っただけで粉々になって使えるものではなかった。

啞然とする店の店主を尻目に弁償代くらいは払って店を出た。

やっぱり騎士の運用に耐えるものはスパッドかメトロ・テカ・クロム鋼で作った武器以外はやはり駄目らしい。

ちえっ、折角切ると炎が巻き起こる剣とか、封魔の力を秘めた剣を使ってみたかったのに。

とりあえず武器はしばらく後になりそうだ。

そう考えているとふとこの街に入って質屋を出た頃からかずっと此方をつけていたやつがいい加減ウザイので捕まえることにした。

どうやらこういった大きな町には少なくとも一つ、多いところで十以上のギルドが存在し、そういったギルドが多いかどうかでその町のランクが決まるらしい。

その為街はギルドを保護し又ギルドも権利を認めてくれる代わりに以来をこなすという形態をとっているらしい。

でこういったギルドは大体が入団フリーらしい。

で時々街の若者が腕試しにギルドの門を叩くらしいがそういった未熟な輩のために教習所を開いているところも多く大概が厳しい訓練と厳格なギルドの掟に挫折して止めていくらしい。

そのためギルドは万年人手不足でこういった入団希望者以外にも各地に散らばったエージェント達が有力なフリーの冒険者や隠れた実力者をスカウトするらしい。

そう言って目の前の少女は涙目ながらに答えた。

あのあと街の角に入ったところで気配を殺し来た奴を待ち伏せして角から出てきたところで捕まえた。

捕まえてその姿を見てみると年のころ十五六の少女だった。

最初なにやら慌てている様だったので騒がれると困るのでそのまま路地裏に連れ込んだ。

でオレをつけていたことを詰問するとしらばつくれたので、喋らなければ頭を捻り潰すぞと言って小さな頭に手を当ててちよつと力をこめた。

そうすると少女は慌てた涙目ながらにさっきのことを言った。

多少要領を得ない事もあったが要約するとこの少女は偶々質屋でオレが「雷狼竜」（例の犬）の素材を見せているところを扉の隙間からコッソリと見たらしく。あの後オレが行った後に店主に俺の事を聞こうとしたが惚けていて全く話にならず、仕方なく急いでオレを探してその後をつけあわよくばギルドにスカウトしようかと考えていたらしかった。

オレがどうして最初から話し掛けて来ないんだと言うと、此れもギルドの掟の一つでエージェントは市民に紛れる為にその正体を知れてはいけなく、また自分が紹介したメンバーがどの段階でつけている事に気付いたかで一種の賭けが行われているらしくつまりオレは知らず知らずの内に賭けの道具にされていたのだ。

賭けのことについて言うと少女は本当にすまなさそうな顔をして謝

つてきて、尾行のについても不快な思いをさせたとして真摯に頭を下げた。

頭を下げるときに見えたはだけた胸元を見ると中々の大きさで少女の見た目を考えると将来が楽しみなものを持っていた。

具体的には少女から大人の階段を上る際、胸だけが一段飛びで先に進んでいる形でそのアンバランスさがオレの心を刺激した。

少女は其れに気付かないようでオレがじつと何かを見ているので不思議に思つて首をかしげた。

兎に角彼女の子・もとい双乳を拝んだので、これからどうするかと言うと、彼女はオレの瞳を覗き込むようにして出来ればこのまま何も言わずにギルドのほうに来て欲しいと懇願した。

斜め四十五度目線で覗き込む少女、しかも目が潤んでいて尚且つその本当に御免なさいという表情が堪らん。

ああ今すぐ彼女を宿までお持ち帰りしてあんなことや此処には書けない事をしてその表情を心行くまで歪める事が出来たらどんなに幸せだろうかと考えながらオレは彼女の懇願に折れる形で彼女についていった。

頭の中でちょうど彼女がオレのことをお兄ちゃんと呼ばせるよう
けている姿を想像しながら。

到着！？（後書き）

現在主人公がいる世界は大体紀元前2000年くらい前の魔法世界です。

あと主人公はもう少し変態成分出したほうが良いですねえ。

ギルド！？（前書き）

なーんか筆が進まん。
何故だ。

ギルド！？

あの後俺達はギルドに向かう途中で色々と話した。

といってもオレは此の世界に来たばかりなので殆ど彼女の話を中心だったが。

彼女の名前はテミスと言って両親は無く現在はギルドマスターの養子になっているらしい。

武器や魔法は使えないが身のこなしや体術に長けその容姿も会い余ってこうして一般市民に紛れてエージェントとして活動している。

そして彼女を養子にしたギルドマスター。よくRPGとかに出てくる爺や婆を想像したが違うらしく、というか良い意味で裏切られた。

マスターは女性の亜人で御年90にも成るが彼女の種族はヒトの三倍の寿命を持ち彼女は一族の中で言えばまだまだ若い方らしい。

そして何より彼女の一族は女性は皆グラマラスでしかも美人ぞろいの不老の一族ときている。

オレは期待を胸に秘めギルドへの道を急いだ。

ギルドに着くとテミスはギルドマスターにオレの事を紹介するため奥へと消えていった。オレは受付のカウンターで待つことになった。

カウンターで手持ち無沙汰にしていたのでオレは適当に何か注文しようかと思ったときに丁度奥から長身の女性が現れた。

大体身長は180cm位だろうか。

彼女はオレに手を出して言った。「ようこそ我がギルドへ。私がギルドマスターのテミス、テイターンよ歓迎するは。」

そう言ってオレは彼女と握手をした後彼女に伴われて奥へと向かった。

奥の執務室で彼女と向かい合うようにソファに座って色々話を聞かれた。

といっても適当に話をでっち上げて長い間武者修行の旅に出たとか生まれたところはもう無いとか、此の街には偶々寄っただけだとか言っていたが名前を聞かれたので此れには少し困った。

名前くらい同とでも成るとして言おうとしたがオレは自分の名前を思い出せずにいた、よくある異世界にきて記憶を失って第二の人生を歩みたいな感じに自分が成ってしまったのだ。

オレはとつさに「バツシュ」といつてしまった。

明らかに偽名だと分かる名前だが彼女は「よい名前ですね。」といつて微笑むだけだった。

このなんとも掴みきれない女性にオレはものすごい魅力を感じていた。スタイルもそうだがちょっとした仕草や話し方がなんかこう大人の女性を感じさせた。

それから改めて彼女の口からギルドへと誘われたのでオレは即座に了承した。

ギルドに入れば色々と束縛されるが、それでも此の女性とお近づきになれる可能性もあるのでオレは喜んで彼女のお誘いを受けた。

その後又受付カウンターに戻つてそこで色々と細々とした事や登録とギルドへの誓いが終わるのを見届けると彼女は仕事が忙しいのでいって施設の案内を受付嬢に任せて奥へといつてしまった。

色々と施設の案内や利用法などを聞いていると既に日は傾いていた。そういえばギルドで分かれてからテミスにあつていない事を思い出したが明日になれば又会えるだろうと思つて伝言を頼んでオレは宿に戻った。

ギルド！？（後書き）

本当はギルドマスターのおっぱいについて詳しく書きたかったが保存に失敗して消えてもう他あり。

ああ100cm以上のオッパイの魅力について書くつもりが。（涙

その後（前書き）

テミス、テーミスこの兩名は主人公の開発により色々とやばい事になっていきます。

主にピンクな展開的な意味で。

その後

ギルドに入ってから彼は十年くらい過ぎた。

このギルドは主に辺境や未開地域での探索やモンスター退治を生業として、オレもそれに習って最初は危険度の小さいものつまりランクの低いものから初めた。

無論ランクの高いほうが高収入も得やすいし、ギルドでの扱いもそれによって違ってくる。具体的には、個室を認められたり、最新の情報を優先的にもらえたり、凄い時にはギルドの顔としてギルドマスターの代わりにギルドの経営を任せられることもあるそうだ。

だが大体半年過ぎる頃には一人で未開拓地域の探索や攻略されていないダンジョン、伝説級のモンスターを狩ってたりした。

あ、そうそう武器とかだけど「ルシユミ」を使って未開拓地域の貴重な鉱石とかも使って何とか太刀を一本作れた。

手かその為にダンジョンや危険な地域に炭鉱夫に行ってた。

まあ、ついで見つけた貴重なアイテムなんかは全部ギルドに渡しだし、あと結構値の張りそうなものは俺が個人的に気に入った子達にこっそりプレゼントしていた。

そうやって色々活躍しすぎて、そうなってくると面倒なことが起きて、どっかの騎士団は仕官しろだとか連日来るし、バトルマニア共がオレに所構わず挑みかかるわ、拳句の果てにそうやって負かした連中が今度は弟子にしてくださいと俺に泣付く始末。

正直言つて、ダルい。

女がない、潤いが無い、おっぱいがない、の三拍子そろってホンと嫌。

まあ、町でも有名な遊び人でもあるオレは娼館に行けば結構もてたし、何より……。

「んっ。何？」

そうやって小首をかしげながら此方を見上げるこの可愛い生物。

もう辛抱たまらん今すぐベットに押し倒して、アゝンなことやコゝンな事をチヨメチヨメしたい。（イヤ割とマジで。）

そういつて現在進行形でオレに頭を撫でられながら、肩を預けているこの少女。

イヤ、もう少女ではないな今はもう立派な一人の女性に成長し、ちよっと目を下げると其処には豊満なおっぱいが二つ、自らの母性を主張していた。

体のラインもしなやかで引き締まっており、それでいて女性特有の丸みのある体つきをしていた。

十年の歳月とオレの調きよ．．．いや俺の大いなる愛の成果が正に今形となってオレの膝の上に乗っているのだ。

そう、この女性こそオレの恋人兼旅のパートナーでもあるテミスである。

いや、ね本と最初の二年くらいは困ったよ。

なんたつてその時オレはギルドでもランク最上位でギルドでも一人居るか居ないかの実力者、さらに伝説級のモンスター討伐や、未開拓地域の三分の二を一人で走破したオレは正に生きる伝説であった。

そんなオレを彼女はまるで物語に出る英雄を見る眼差しでずっと見ていてくれた。

いや、別にそれも悪くはないがそうなるとテミスやギルドのメンバーとの間に距離ができてしまった。

それにテミスは最初この世界で始めて出来た親友であり色々和不慣れなオレを助けてくれた恩人でもある。

そうなるとオレは何だか無性に悲しくなってるんでどうにか彼女だけでも繋ぎ止めたいと思って・・・。

まあ、色々とあってその辺は省略ということで、それで現在の関係を築いたというわけだ。(いや話すと彼女の初体験が何時だったのかも話さなくてはならないのでそれはご勘弁を。)

少し昔を思い浮かべながら、オレは優しく彼女の髪を梳いて、「何でもない。」と呟いた。

俺が髪を梳くとテミスはくすぐったそうにした。

そうやってオレと彼女の時間は過ぎていく。

ちなみに彼女の養母でもあるギルドマスター、ことテミスと勿論アダルトイイな関係になっていたりする。(流石はギルドマスターだけあってハリ、ツヤ、大きさ、どれも文句なし。さらに感度もいいから色々と楽しめちゃいました。)

まあ、公にはオレは押しも押されぬギルドの顔としてテーマスと一緒に居ることが自然と出来る様になが、そうなると二人の中が気まづくなったりするのでそこら辺もオレの調・・・数日に渡る愛のあるお話により互いに認め合う形で落ち着いた。

その代わり娼館に行くと翌日白い目で二人に見られるのが難点だが。（だって、他にもおっぱい楽しみたいんだもん。男の子は生まれながらにして皆オッパイ星人だもん。）

だけどその日の夜は三人でアゝンな事やソゝンな事や新たなチヨメチヨメを開発したりして、翌日には三人ともすつきりお肌つやつやだったりする。

そうやってオレのギルドでの十年間は過ぎていった。

その後（後書き）

皆さん親子丼は好きですか？

私は大好きだあああああああ

！！

テミスは大体二十歳前半。テミスは百年生きているが人間でいうと、大体二十代後半くらい。ちなみにEとGです何がとは申しませんが。主人公によって今後更に・・・。

次は姉妹丼が食いたいなと思います。（ジュルリ

最終的には満漢全席がいいと思いますが、皆様は如何思われますか？

双嵐！？（前書き）

今回はちょっと某ハンターのなノリになります。

双嵐！？

峰高い霊峰で、オレは”それ”と対峙した。

嵐の中に住み嵐を身に纏い純白に輝く鱗を持ち立派な角を生やし、腕全体に魚のヒレの様なものを持ちたなびく背鰭と合い余ってまるで天女の羽衣のように見えた。

だが、その双眸は獰猛で紅いその瞳には何者も写さず、常人が見ればそれだけで腰が抜けてしまう瞳の深さを持っていた。

神々しいまでの体の輝きと、無機質な目がこれが他とは一線を隔てる存在であるとオレに教えてい。

しかも、悪いことに竜巻は一つではなく二つ一緒に動いていて勿論一方だけに”それ”がいる筈が無く、二対の龍がオレを取り囲んでいた。

さて、久々に仕事が来た。

といつても、ギルドランク最上位であるオレは殆ど仕事をしなくてもギルドからの年金や、今までの報酬があれば十分生活できた。

それでも仕事をしなくてはいけない時がある。

まず、ギルドマスターの命令やギルドが所属している王国の国王の要請、あとギルド全体または国全体で事に当たらなければならぬ事については拒否権はなく強制参加である。

で、今回の依頼は辺境の探索である。

こういった辺境や未開拓地域の探索も国王の要請で行われその代わり国からの支援を受けることができる。

支援の中身は様々だが、主に現地までのガイドと旅費、後は申請さえすれば護衛までつけてくれる。

でで、今回の辺境探索だがどうも臭い。

内容があいまいだし、何より情報が余り入ってこない。テミスに探らせてもなんら成果は無かった。

テミスにも一応聞いたが、王国の要請と辺境までの道のり以外は全くもって不明。

ただ、現地に着いたら現地人の村長が詳しい話をしてくれる、という事までは分かった。

まあ、最近外にでてないし体が鈍る前にカンを取り戻すついでに行ってみる事にした。

たしか辺境の村の名前は「ユケムリムラ」だっけか？取り合えず其処までいくことにした。

村に着くとまず村長に挨拶に行った。

この村の村長は初め見たときはかなり若いと思ったが長い耳が特徴の竜人族で実際の見かけとは裏腹に二百年以上は生きているらしい。

だが、二百年生きても慎ましい胸元はオレが調教してもあまり変化がなさそうなのが残念だった。

で、話を聞くとところこの「溪流」の奥地に霊峰という特別な場所があつて現在そこに巨大な嵐がとどまっているそうだ。

嵐と大雨のせいで並みの人間では様子を見に行くことが出来ずこうやって王国に調査を依頼したところオレが選ばれたらしい。

つまり、今回の調査はその嵐がある霊峰まで行って様子を見て来いという事らしい。

ま、様子を見に行く程度ならわざわざオレが呼ばれるはずが無いので詳しく聞くと、この嵐のせいか「溪流」で雷狼竜や迅竜、尾槌竜が暴れているらしく又「霊峰」までの道のりも険しいため並みの冒険者では辿り着けないそうだ。

そういう事なら、とオレは胸騒ぎを抑えつつオレには珍しく準備を整えてから行くことにした。

途中まで村人に案内されて本格的にヤバイ所に入ったら、先に戻らせてオレ一人で目指した。

「溪流」に入って直ぐお出迎えかと思っただけでもなく、ただ本来聞こえてくるはずの虫の鳴き声や獣の気配が無く、ただ耳を打つ大雨と強い風だけが聞こえていた。

慎重に一步一步進んでいくと以外もそういった手合いとは会わずにすんだ。だが、逆にこれが嵐の前の静けさだったのかもしれない。

「霊峰」につくとそこからは山登りではなく崖登りだった。

雨や苔のせいで滑りやすくなった岩肌を何とか登り途中からは洞窟に入って上を目指した。

そして、頂上まで登りきると丁度嵐の中心点に位置していて風を感じなかった。

だが、何かの気配を感じた。それもとてつもなく巨大で異質な気配を。

そして嵐の中から”それ”らは現れた・・・。

双嵐！？（後書き）

段々ネギま！の世界から離れて行ってるので次の次くらいで修正していききたいと思います。

あと主人公設定のほうもこの後更新しようと思いますのでよろしければそちらもご覧下さい。

晴天

上空にたたずむ二体の龍。

全く、如何してこうなったんだか。オレはそう思いながらも腰に下げた太刀の柄を握り締めた。

能力を制限している関係上今のオレは大体一般的騎士より少し上程度だしそれも反応に限ったことだ。後の部分は普通の人間とそう変わらない。

オレは最悪能力の拘束解除も含め目の前の龍と対峙した。

先に動いたのは向こうだった。目の前の一頭がこちらに地面すれすれを飛行しながら突撃してきた。

オレはそれを素早く横に転がって回避しもう一匹はと探した、すると不意に俺の後ろに殺気を感じて振り向きざまに太刀を抜かずにそれと打ち合った。

どうやらもう一頭の方は後ろにピッタリと着いていて、俺にその爪を振るおうとしていたらしいが俺が一瞬は早く殺気に気づいて今鞘と爪との珍しい鏝迫り合いを行っていた。

オレがこのままでは押し切られると思って柄に手を書け太刀を抜こうとすると、不意に目の前の龍が鰐迫り合いを止め入れ替わるようにもう一頭が俺を一飲みにしようと口をあけて突っ込んできた。

オレはそれを逆に前のほうに転がることによって回避し振り返ってもう一度二対の龍と対峙した。

そして、オレは、柄にかけていた手を引き太刀を抜きはなった。

「さあて、今度はこっちの番だぜ。」オレはそう言うのと薄く光り輝く太刀を後ろに下げ体を前に出して剣を隠し構えを見せた。

龍は太刀を抜くと明らかに警戒した様子を見せ、さっきまでの様に問答無用で突っ込んでくるような事をせず二体ともこちらとの間合いを計るような仕草を見せた。

どうやら一定以上の知能を有するようだ。それにこの天候を操る能力、伝説級の古代種だなと当たりをつけた。

降りしきる雨が衣服をぬらし冷えた体が体力を奪い滴る雨が太刀を握る手を滑りやすくする、さらに雨によって滑りやすくなった台地が機動力を削ぐ。

全く厄介なものだ、これじゃあ報酬と釣り合わないな、と軽口を叩きながらオレは奴らの方を見た。

この環境じゃあ余り時間を掛けられないし何よりこちらに興味を失ってまた上空にでも上がられたら手出しができないしな。

オレは覚悟を決めて奴等に向かって走り始めた。

それは唯愚直に向かってくる人間には注意しておらずその手に握る太刀のみに神経を集中していた。

本能が喚く、あれは危険だと。そしてそれらは無謀にもこちらに向かってくる人間をあざ笑いつつ使い手が唯の人間では報われないな、と思い引導を渡してやろうと胸に力を溜めた。

しかし、目の前に向かってきた人間が突然増えた、いやそう錯覚した。故龍の動体視力をもつてしても錯覚するその速さにそれらは混乱した。

そして混乱している隙にも分身した人間がこちらに突っ込んでくる、二頭は急いで上空へと舞い上がるうとしたが間に合わなかった。

目の前に人間の姿が見え太刀が振るわれた、そして斬られたと思う間も無く一頭の龍の角が折れ、もう一頭は背中中のヒレを斬られた。

一瞬にして自分達の体を傷つけさらに一番硬いとされる角を折る、それらは思った注意するべきは太刀だけでなくその使い手も超人だと。

「チツ」、オレは舌を打ちながら二体の龍を睨んだ、さっきの一撃で少なくとも一頭は仕留めもう一頭の機動力を奪うはずだったんだが頭を狙った斬逆は角に阻まれもう一体の方もギリギリで狙いを僅かに外された。

全くこっちはさっきの攻撃と返しの一撃で終わらせるつもりだったんだが、予想以上にしぶとい。いや決して侮ってはいないはずだったんだがオレも慢心したもんだと呟いた。

しかし、さっきの無茶な攻撃で体中が悲鳴を上げ激痛が全身を駆け巡る、今すぐにでも太刀を手放して地面を転げまわり叫びたい。しかしオレはそれに何とか耐え相手と正対した。全力で動けて五秒、太刀を振るうのに三手位しか持たない。

それ以上は体が内側から張り裂けて死ぬしかない。と当たりをつけて息を吐いた。

オレはさっきの攻撃でより警戒心を増した相手にあと三手で仕留めなければならぬ。まったく状況は最悪だし回避も間々ならない体だ。

どうやって仕留めるかと考えていると。

すると突然台地に咆哮が轟いた、すると二体の龍がその純白の体を紫に変えそこにはさっきまでの神々しさは無く、ただ全てを吹き飛ばす災厄の神がいた。

どうやら、あちらさんも本気でかかって来る様だ、こりゃ死ぬかもな。そう思いながらオレは構えを解きゆつくりと身を任せるようにした。

体の力を全て抜き、何も考えず唯自然体でいる。オレは剣の極地に瀕死の状態ながら至った。

そして相手の手を待った。

それらはこの人間が全力でぶつかるのに値すると思ひ事実体中の色

を禍々しい紫へと変え全力の攻撃を放とうとした。

それらは互いに逆回転で体をくねらせその場に風を呼んだ。そうして段々と風が吸い寄せられるように集まり二つの巨大な竜巻が姿を現した。

そして竜巻が大きくなるにつれありとあらゆるものが吸い寄せられていった。そして人間も始めは抵抗するのかと思ったが諦めて今では身を任せるようにしている。

そして人間が二つの竜巻の間に吸い込まれてその身をズタズタに引き裂かれ風で舞い上がったところに自分達の渾身のブレスを放つ。

姉妹の最強の攻撃であり正に禍神にふさわしい攻撃であつた。

そして竜巻に乗って人間が出て来るのを待っていると一つの物体が上空に舞い上がってきた。

龍達は狙い変わらずそれに向けて全力のブレスを吐き、レーザーの様な水のブレスがそれを断ち切ったところで始めて分かった。

自分達が攻撃したのは人間に折られた角だと。ではあの人間は、不意に上を見るとあの人間が自分達よりも高く舞い上がっていた。

角に攻撃をしている隙に人間を見失うとは、しかし後悔してももう遅い。それらはただ自分達に降りかかってくる死の恐怖に動く事すら出来なかった。

オレは目を開けるといつの間にか空の上へと飛ばされていた、そして下を見るとさっきの龍がこちらを見ている。

オレは極めて自然に太刀を構えてそして擦れ違いざまに三度太刀を振るった。

気がつくと俺は台地の上において空はさっきまでの嵐ではなく太陽が出て雲一つ無い青空が広がっていた。

そして、ふと横を見ると傷ついた龍が二頭台地にその身を横たえていた。

「はあ、」と息を吐いてオレは一言「風呂入ってオンニヤノコとやりたい気分だぜ。」と空気ぶち壊しな事を言いながら再び目を閉じた。

晴天（後書き）

うーん実はこの二頭の龍、てかアマツさんね、当初は割りとおつさり倒して実はダメージを負うと人間に変身して、でつるぺた美白姉妹で、そのまま主人公が持ち帰りをしてニヤンニヤンするつもりだったんですが、明らかにアウトな表現が入ってしまうので止めて普通の闘いにしました。やっぱりロリじゃあアグネスが煩いから拙いすよね、だって幼女監禁プレイするつもりだったんで。（笑）

てか、アマツの玉でねえ。 いったいあと何体狩ればいいんだあ。

その後・・・。（前書き）

展開を早くするためにちょっと時間が飛びます。早くネギ魔住人を
出したいんで。

今回はシリアスに挑戦します（笑

その後・・・。

結局あの二頭は生きていた。

といっても虫の息だったが、が俺のほうも無茶をし過ぎたせいで体中が悲鳴を上げていてとてもじゃないけど止めをさせる状態じゃあなかった。

まあ互いに動けない状態でどうにか意思は通じるようなので交渉をもつ事にした。

でも最初は行き成り頭の中で少女の声が響いたんで驚いたが。

どうもこの龍は異世界から流れ着いた姉妹でそのため故郷に良く似たここを棲み家にしていたらしいのだが数十年単位で訪れる移動の時期に丁度進路上に村があったのだが彼女たちにとっては別に害を加える意思はなく唯通り道としてあっただけの話だったのだ。

で話し合いの結果彼女達には少し進路をずらして貰い村への直撃を何とか避ける事が出来た。

まあその代わり毎年決まった季節にこの台地に貢納をする事で以後の村の安全を保障してくれるそうだが、貢納を怠らなければの話だが。

暫くすると何とか体が動かせるようになったので俺は体を引きずるようにして霊峰を後にした。

途中の渓流ではモンスターに襲われないかとヒヤヒヤしたが無事に村に戻る事が出来た。

村長に事の顛末を話し、以後この村では毎年霊峰にいる神に奉げものをする事が決められた。

俺は一先ず傷つた体を癒すために村にある温泉宿に数日逗留することになった。

その後無事に傷が癒えたオレはギルドに戻る事が出来あんまり遅く帰ったもんだからオレの嫁ことテミスが心配して帰ってくるなりオレにサマーソルトキックと首を決めてからの飛び膝蹴り、キャラメルクラッチにナイアガラバスターのコンボを決められどこぞの地上最強の弟子だとツツコミたくなつたがその後泣きながらヘッドロックを決める姿を見て何だかすまない気持ちになった。

まあ女を泣かせたとあっちゃあ男が廃るというもんで色々でテミスを慰めたりして、まあ、なんだ、その、で、デ、出来ちゃったみたいなんでオレも年貢の納め時と腹を括ってテミスと一緒にすることになった。

結婚をする時にテミスとひと悶着あったが可愛い愛娘が嫁に行く
とあっちゃあ母としては色々を含むところもあっただろうにでもオ
レ達を祝福してくれた。

そして子供が生まれてオレも以前のように世界中を冒険しなくなり
テミスと共にギルドの仕事を手伝いながら幸せな毎日を過ごしてい
た。

そう幸せだったんだ・・・この時は。

人は変化していくものだそれはどうしようもないことだし時代は流
れていくしかし変化しないものたちにとってはそれは当たり前では
ない。

子供が生まれ育ちやがて大人になり結婚し子供が生まれそして老い
て死ぬ。

でもその中のサイクルから外れてしまったものは如何するのだろう
？人よりも長い寿命と何年経っても老いない体。何時までも成長し
ない子供。

周りの友人や知り合いが次々と老い死んでいく現実。

この世界のこの時代の人間の寿命は大体六十年前後だったが騎士とダイバーの力を持ち最強の肉体を持つ俺の体は老いることはなく百年以上もの時を刻み付けるこの体を今ほど恨めしく思ったことはない。

そしてそれは俺の子供にも言える。生まれてからちゃんと成長するのに何十年もかかった。

最初はオレもどうにかしようと思ったでも、これが騎士の血をもつものの宿命なのだと悟った。

何時までも成長しない子供、そして何十年も変わらないオレに対して何時しか人々の見る目が化け物を見るそれに変っていった。

子供がやつと外を自由に駆け回れるくらいに成長した時既に四十年以上が経っていた。テミスはもうこの子が大人になる前に死んでしまったのだ。

テミスが死ぬと既に置いてギルドマスターの職を辞したテミスに別れの挨拶をしてからオレは子供をつれてギルドを街を出た。

オレとテミスとの思い出を残しながら。

それから苦難の連続だった。不老の親子と言うことで人々に蔑まれ騎士としての力を振るえば感謝されるどころか余計に化け物として人々はオレ達を忌諱するようになった。

王族や権力者達是不老の秘密を得ようと軍隊を差し向け、オレ達親子に賞金まで掛けた。

いつそのことこの力を自由に振るい世界を恐怖で支配してしまおうかとも思ったが、妻と出会わせてくれたこの美しくも残酷な世界を壊すことなど俺にはとても出来なかった。

そうして五十年以上も放浪した挙句俺達はその場所にたどり着いた。

何も無い唯の真っ平らな平原についたときオレ達親子は倒れ伏してしまった。辛い事、苦しいこと、悲しいこと、恐ろしいことの連続でオレ達親子の精神と肉体はとうの昔に限界を越えていた。

オレはこの世界に来て初めて祈った。もうオレ達親子を休ませてくれ。妻の下にオレ達を逝かせてくれ。もうこんな事は懲り懲りだ、神でも悪魔でもいいオレ達親子に安息の地を。誰でもいいオレ達親子に救いを！

するとさっき迄晴れていた空が曇り始め雨粒をオレ達に落とし始めた。

このままず濡れになって惨めなボロ雑巾のような最後がお望みらしい。所詮はこの世界のイレギュラー。世界はオレ達を否定する。

そうしてオレは子供に覆いかぶさるようにして目を閉じた。

く新・二つの世界 未完！く ラホツの次回作にご期待下さい。

その者達は遥か魔法世界ができた折まだ不安定だったため次元の歪みによって様々な世界からこの魔法世界に連れてこられてしまったものたちの末裔だった。

彼らは来る日も来る日もこの世界へ変えることを望み異世界の夜空に涙を零した。

そうして魔法世界が百年を過ぎる頃この世界にこの世界から始めか
らいた知恵ある種族とはまた違ったモノ達が来た。

この世界を創造した者が来た世界、鏡写しのように成り立つ二つの
異なる世界。だが両者は密接な関係で結ばれ世界を安定させた。

人間世界から来た彼らはその類稀なる好奇心と貪欲さとを併せ持ち
世界に瞬く間に広がった。

そしてもとからいる彼らから見て亜人と呼ばれる者達と対立するよ
うになる。そればかりかその亜人達からも異質とされ世界の異端と
して排斥されていた彼らをも攻撃し土地を人を家族を命さえも奪つ
ていった。

そうして彼らは世界中から迫害されそうして長く苦しい旅を経てよ
うやく人も亜人も住み着いていない場所にたどり着き彼らはそこで
集落を作りひっそりと暮らしていった。

そんなある時村の村長が社むらおのの中で自分達の世界の神に祈っていると
突然頭の中に光が溢れ声が響いた。

村長は驚いてすぐさま平伏し神のお告げを聞いた。

「恐れるな。異界に連れてこられし哀れなものよ、我はそなたらが信ずる世界の神ではない。」

「そなたらの世界の神は次元を超えるも世界を超えること適わず、
が我は世界を超え理を変ずるものなり、そなたらに告げる」

村長は畏まって黙ってお告げを聞いていた。

「この世界より遙か高みの世界よりあるお方が舞い降りる。そのお方はやがて滅び行く世界に新たな展望を齎して下さるだろう。」

そう言つと頭の中から声が消えそして光がまるで最初から無かったかのようにつそのように頭の中が静まり返った。

しかし耳にはしっかりと異界の神の声が刻まれた。

- そなたらの苦難が報われる事があらんことを、さらばだ。 -

そうして暫くすると村の若者が社に走りこんできて「平原でずぶ濡

れの人が倒れているのを見つけた」と告げた。

それは酷く困惑していた。何故自分のような高位の存在が人の前に姿を現したのか、いや、そもそも我は一体何時から存在しているのか。

そして何故あのようなことを告げたのか、全く分からず高位な存在である自分にさえ分からないことにその存在は酷く不安定になっていた。

しかし、次元世界を飛び時間と空間の狭間にいる時それは突然天啓を受けたように疑問が解けた。

あのお方が我を作りこの世界でそうなるようにプログラムなされたのだ。そして我以上のあのお方こそ”次なる世界”へのお方なのだと気付いた。

そうして彼は時間を空間を世界をもう一度超え再びあの世界に舞い戻るだろう、その時こそ我を創造し我に使命を与えそして”次なる世界”のお方こそ我が使えるべきお方。

そう、この偽りの世界の代行者兼観察者でしかなかった我がウェト
ウ・マギクスが存在する証明。

あのお方に再びそして初めてまみえるためにその存在は暫し世界と
次元と空間と時間とに別れを告げ一人の存在としてあのお方の誕生
を待つのだ。

その後・・・。（後書き）

毎回思うんですが不老不死の転生者ってどうやって暇を潰しているんでしょうか。

あのアマテラス陛下でさえ最後には星団を消滅させてしまった訳ですから神ならざる人の身分で永劫の時を生きるもの達はいったい何を思っているんでしょうか？

恐らくエバ様やアーカード様のように人を捨てるか或いは人のまま誰にも理解されぬまま最後の審判の時まで永遠に苦しむのか、どちらなのでしょう。

この世界に転生した主人公の物語は一応これで終わりです。しかし小説の中では彼は過去の出来事存在として度々物語に出てくるかもしれません。では、作者の次回作にご期待下さい（笑）

王国（前書き）

今回は小話を一つ書いてみました。

王国

紀元674年 A・D・K グローゼン王国 パンデモニウム城

煌びやかな装飾品やインテリアが置かれた豪華絢爛な部屋に、簡素だがしかし高級感溢れる着物を着た男が熱心に書類を読んでいた。

「またですか、そうですか・・・。」

そう呟いた男は、女性が着る着物を着ていて下にはスカートを履いていた。全体的に無駄な装飾を省き白地に金糸をあしらっただけの簡素な衣装。

顔は全体的にほっそりとして中性的であるが眼鏡を掛けたその瞳は理知的な光を宿していた。

そして黒く長い艶のある髪を頭の後ろで一纏めにして柄の先に宝石がついた簪を刺していた。

男は書類を読み進め最後まで読むと書類の束を机に投げ出した。

そしてずれかかった眼鏡を直し机の端に置いてある呼び鈴を鳴らした。

すぐに隣の部屋に控えていただろう従者の一人が来て今日の業務は

これで終わりだと告げた。

そうして従者が恭しく一礼して部屋を出ると。

男はゆっくりとした動作で椅子から立ち上がり太陽の光が差し込める窓ガラスの方に歩いていった。

そして窓を開け部屋に入ってくる風で書類が舞うのも気にせず一言外に向かって呟いた。

「また、子供が生まれた・・・。」

そう何処か哀愁を漂わせるこの男こそ齢百二十歳にしてグローゼン王国でありエリジウム大陸一帯を占めるA・D・K・第七代皇帝、フェフィール・メイ・ダン・グローゼンその人である。

が大層な名前と称号とは裏腹に今この男は失意のどん底にあった。

時々「如何してこうなった、如何してこうなった、」と不気味に呟く彼の姿は決して下々の者には見せてはいけない姿だった。

そう、そこにいるのは身内の不始末に心身ともにボロボロにされた

情けない男がいるだけだった。

そんな彼に不意に後ろから不謹慎にも「よっ」と掛け声を掛け気安く肩に手を置く男が現れた。

振り返ってみるとその男は彼の悩みなど知らないのか極めて能天気な幸せそうな顔で笑っていた。

フェフィールもつられて笑うが何処かその笑いは簡素に響き、顔は引きつりそして・・・。

「どの面下げて帰ってきたー！！！」

と、絶叫と共に腰に下げていた太刀を抜き放ち居合いの要領で男を一閃した。

その影響で部屋は吹き飛び衝撃は遠く町中に響き渡り、下の階にいた大臣達は「またかと」と頭を抑えて非難活動を開始した。

そしてファフィールは相手の姿を確認せずに二ノ太刀、三ノ太刀、を振るい、彼がいるフロア全体が破壊され壁にいたっては最初の衝撃で吹き飛び、青空を見せていた。

そうすると、瓦礫の中からさっきの男が出てきて埃を払いながら言った。

「まったく、今度は何だ？爺臭い事は言いたかないがあんま怒ると将来禿げ．．．。」

最後まで言い切る前に次の太刀が飛んできて衝撃を伴う真空刃で彼を細切れにしようとする。

しかし、男はそれを無傷で受けた。いやそうではない。衝撃波が届く前に文字道理光速で片腕を振って衝撃波を打ち消したのだ。

「最後まで言わせろよ。年長者の言うことは聞くもんだぜ。」男はヤレヤレといった風に顔を横に振りながらまるで堪えてないように言った。

「誰が年長者ですか！！長く生きていることをいい事にあつちこつちの女に手を出して孕ませた挙句に厄介ことは全部こっちにまかせばなし。」

「いい加減国父として、高祖としての威厳を見せなさい！国は貴方の尻を拭くためにあるのではないんですよ。」

そこまで一気に言うと流石に頭が冷えてきたのかフェフィールは太刀を下げずれて埃塗れになった眼鏡を拭い掛けなおした。

「全く、そんなことでは初代様や亡き皇后様もお嘆きですよ。少しは国政を省みたらどうです。バッシュ・ダン・グローゼン太祖陛下。」

男が反論して「失礼な。まるで俺が無駄飯ぐらいの石潰しの様な言い草じゃあないか。すると何か俺は寄生虫か。」

「はつきり申し上げて害虫です。」フェフィールがきっぱりと言いつ放った。

そう言われて明らかに「ガクッ」と頭を下げるバッシュ。

「だいたい貴方は……………。」以下フェフィールのお説教が三時間以上に渡った。

・三時間後・

「ふう、今回はこれ位でいいでしょう。しかし今度やった場合はミラージュのインフェルノ・ナパームで焼滅させますからね、いいですね。」

と念を押しておく。

だが悪いことは重なるものでバツシュがここに来て重大な事を白状する。

「もう分かったから、次やら無ければいいんだろ。だったら今はいいんだよな。」

そう言って含み笑いを見せながらある事を告白する。

「実は秘密で地球にも遊びに行つててそれで・・・その・・・まあ・・・で、でき・・・。」

しかし彼の言葉は最後まで言うことは出来なかった。

壊れたような笑いを上げ先祖伝来の太刀を掲げた悪鬼がそこにはいたからだ。

そして、爆音と共に王宮中に絶叫が響き渡った。

その後地上百二十階建ての王宮のうち九十階から先が地上から姿を消すことになるがそれはまた別のお話・・・。

王国（後書き）

うん。やっぱり騎士同士の戦いは想像するのが難しい。

下手な能力や必殺技を使う奴よりも純粹なパワーとスピードで来る奴ほど書き難い。

ま、次回はやっとMHが出るのでその描写を練習中です。

ロリコンでは無い！小さい子が好きなだけだ！！（前書き）

疲れた。

ねたが切れた。

ゆえに、ロリを所望する。

ロリコンでは無い！小さい子が好きなだけだ！！

グローゼン王国 パンデモニウム城

修復されたばかりの執務室で今日もフェフィール皇帝はうず高く詰まれた書類の決裁など政務に励んでいた。

しかし、書類の半分以上は自分の不甲斐無い身内の後処理について、後は今後の対策計画と、見るほうも作るほうも両方泣けてくるという始末だ。

フェフィールは本気で高祖の封印を考えつつも、しかし、高祖が作った子供のおかげで、純血の騎士の力が帝国に入ることにより得る利益を考えると、彼をして判断が難しい所だ。

ま、流石に前回の地球まで食手を広げていたのはこちらの落ち度だ。今一度防諜体制を整えねば。

後の事は官僚に任せればいいな。そう考えながらフェフィールはほぼ習慣となってしまうた執務室の窓を開けて呟いた。

「嫁さん欲しいなあ。」

そう、この皇帝、本来成人してから嫁を娶るはずであったが、しかし、高祖の不祥事に手を焼かされ結局結婚は出来ず。

更に、高祖及び歴代の皇帝とが何らかの特殊な性的趣味を持っていたことも合い余ってなかなか女の子が寄り付かない。

そんな時、彼に救世主が現れた。

彼女は、他の女性と違い、彼に身分の差や彼の身内の不祥事などなんのその、ただ純粹に一人の男として彼を見てくれた。

彼女と出会ったのはとあるパーティーでだ。まだまだレディーには程遠いがしかし合った瞬間、私の心は何かときめいた。

そしてあの純粹無垢な笑顔、貴族の子女が向けるような作られた笑顔ではなく、本当に心のそこから笑いかけるあの笑顔に何度救われたことか。

そして、ついに、私は、彼女に結婚を申し込んだ。

その事を回りに告げると、

「変体」

「皇帝それは．．．。」

「皇帝あんたもか．．．。」

「いや、近寄らないで!!」

「母は悲しいぞ、そんな子に育てた覚えは．．．ウウウ。」

「息子よ、そなたは少し疲れているのだ。ゆっくり養生するといい。」

「この、変体、変体、変体、大変体。」

「近寄らないで、蛆虫。」

「死んでください。ニコッ。」

などなど周りの反対にあって結局結婚できなかった。全く彼女のどこが気に入らないのか？

たった年の差百歳ほどじゃあないか。全くどこが悪いんだか。相手は今年で九才になる女性なのに。

皆が反対するのでここは一つ先人の知恵に肖って不本意ながら高祖、バッシュ様に相談してみた。

すると。

「まあ、なんだ、その、可愛いは正義！！だ。」

流石は高祖、私の思いをきちんと理解してくれた、しかし時々「ろりこん？」と呟くのはなんででしょう？

はて、ろりこん、とはどんな意味なのでしょう。

その後、フェフィール皇帝は、光源氏も真つ青な幼女好きになり、歴史書に史上初のロリコン皇帝として名を残す頃になる。

また、彼の迷著「ドキッ。素敵な幼な妻を作ろう！」は、後のロリコンたちのバイブルとなったとかどうだとか。

ロリコンでは無い！小さい子が好きただけだ！！（後書き）

第二部は、歴代皇帝の後宮とか女性癖とか男の夢を追求できればいいですねえ。

魔法大戦（前書き）

一ヶ月以上間が空いてすみません。別の作品を大量？に投稿していたので既存の作品が後回しになってしまいました。

あと改めてこの作品の内容とあらずじと初期プロットを見たのですが、気に入らない居ので何れ修正します。というか消します。気に入らない。今はオッパイより尻です。特に皺を数えるのが好みです。

今回の話は今までの話を全て無視したうえで書かれています。その点にご注意下さい。

魔法大戦

大分裂戦争。

史実においてそう記録されるこの戦争はしかし遙か太古に訪れた転生者によって大きく変る事となる。

A・D・K・

その歴史は古く紀元前まで遡りかの始祖の血を引くウェスペルタテ
イア王国に次いで二番目に古い魔法世界での歴史を持つ大国。

初代皇帝から代々常人を越えた力を持つ子が生まれ、神の如き力を
振るいエリジウム大陸南部全域と龍山山脈とボレアリス海峡までを
治める強大な帝国へと成長した。

代々の皇帝の異能と超常の力、更に人ならざるものを生み出す魔法
とは異なった技術とがこの国をして他国の心胆を寒からしめる要因
となっている。

この超大国の存在がどの様に魔法世界に関わるのか？歴史を紐解い
てみようと思う。

ヘラス帝国とメセンブリーナ連合とが長年の歴史的民族的対立に端
を發し遂に開戦。

魔法世界を二分する一大大戦へと発展することとなった。

そしてもう一つの大国は・・・。

- A・D・K・首都パンデモニウム城 -

豪華絢爛な執務室でこの国の大臣と將軍もつ一人の人物。

この国を血と恐怖と力とで統べ他国に流血皇帝とあだ名されるA・
D・K・史上最も血を好んだ第二十三代皇帝アウグスト・ネロ・カ
リグラ・ダン・グローゼン。

齡二百五十を越え既になりの高齢になっている筈だがその顔と肌
は若々しく彼の特殊な血筋を知らぬものが見ればとても人の倍以上
の年月を生きた男とはとても思わないであろう。

この三人とが執務室で極秘の会議を行っていた。

「さて、近頃^{よそ}各国の裏で徘徊する連中が目立つが俺の国ではどうな
っている。」

執務室に設けられた豪華な机の上で腕を組み傲岸不遜に言い放った
皇帝アウグストは面白そうにクククと笑った。

「はっ、陛下。現在目下調査中ですが構成員と思われる者の内その
70%をパラギルド捕縛ないし排除しております。残りの構成員に
対しては監視の強化と勢力の後退とで思うように動けないでしょう。
じき掃討は完了します。」

ボン・ヴァーン大臣が事も無げに答えるが、実際は阿鼻絶句地の地で血を洗うような凄惨な粛清が裏で行われているのをこの場に居る全員が知っていた。

「軍部の方でも諜報部及び監査部とパラギルドの協力もあり協力者を捕縛し残りは厳重な監視の下残党を誘き寄せる餌として使っています。まあ、用が無くなれば此方の方で処理をいたしますが。」

大臣と將軍の答えに満足した皇帝はこういった。

「そうだ、反逆者には容赦はいらぬ。二度とこの私に齒向かわん様にするのも皇帝たる私の務めだ。貴様らもよく肝に命じておけ。」

そういつて皇帝の部屋を震わすほどの殺気を二人に浴びせるが、彼らは一瞬身構えたがしかし次の瞬間には恭しく礼をし、

「我ら一同陛下の忠実な家臣にして帝国の道具であります。皇帝たる陛下の命令こそ我らの存在理由。その陛下の恩を忘れあまつさえ売国奴に成り下がる者などその命をもつてしても許されるはずが御座いませぬ。陛下のお手を煩わせずとも我ら自身で裏切り者を抹殺いたします。その上で帝国に更なる忠誠を奉げます。」

大臣と將軍は膝を付き再度皇帝の前で忠誠の誓いを立てた。

この様子からこの国の支配者たる皇帝がどのような存在か見て取れる。

「だが殺しているだけでは芸が無い。彼奴らの目的は当然掴めているのだろっ。」

大臣たちは立ち上がりまるで何も無かったかのように皇帝の問いに

答えた。

「無論で御座います。情報を脳髓から抜き出し必要なものを洗っていますのでもう少しで彼奴らの全貌も掴めるでしょう。今のところは国々を煽り対立を引き起こしての大戦が目的と判明しております。」

「しかし、我が国以外でどの程度この組織が浸透しているのかは分かりませんが国内が安定しだい国外での調査を続けます。」

大臣の言葉に続いて將軍も答えた。

「現在国境上で小競り合いが頻発し領海領空ともに侵犯が絶えません。更には幾つかの国で首都に兵力が集まりそれにより各国で渡航制限が行われています。」

「事実上の総戦力戦の準備とその前哨戦といった所か。百二十年前のことをもう忘れたのか奴らは。」

「で、陛下いかがいたしますか。」

「ふん、決まっております。我が帝国に仇なす者は誰であろうと例えそれがこの世界の神であろうと剣を取るが我が帝国に科せられた使命。この世界の住人にもう一度帝国の帝國たる由縁を教えてやらねばな。」

帝國の歴史は剣と炎で創られている。初代皇帝から二千年以上もの長きに渡りこの国は絶えず外敵の脅威に晒されその度に帝国は力をつけ領土を増やしこの世界に確固たる地盤を築き上げたのだ。

しかし近年は状況の変化により他国と強調路線をとった為特に北部の国々で帝國に対する認識が薄まり政治や国境を巡り対立する事が多くなった。

だがこの男はもう一度昔の帝國に戻そうとしていた。それによりどのような結果を迎えるのかはこの時はまだ誰も分からない。

「では直にでも軍の再編を行いますので私はこれで。」

「私も各部署と世論操作もありますので私もこれで。」

「うむ、俺の帝國の為に励め。」

「「御意」」

大臣と將軍が部屋を出るのを見計らうようにして、皇帝の陰に隠れていたバツシュ・ダン・グローゼンが姿を現した。

「これはこれは高祖様。極秘の会談を盗み聞きとは国父にあるまじき姿と先代が化けて出てきますぞ。」

「その先代を殺した男がよく言う。あまつさえ先代に忠誠心厚いものや自分の気に入らないものさらに女房や子供まで殺したお前が言えた事か。」

この男がやってきた悪行三昧の数々をいって苦笑いするバツシュ。しかしアウグストは何処かこの会話を楽しむように話を続けた。

「確かに私も色々やりましたが世間ではこれでも人気がある方なんですよ、それに高祖さまこそ今ではすっかりおとなしくおなり成

されましたが色の武勇伝の数々に比べれば私のやったことなどとても適いはいませんよ。」

そいつって暫く二人で笑いあつたあとバツシュが本題を切り出した。

「で、お前さんは一体何処まで首を突つ込むつもりだ？一応代々の皇帝には俺が知る限りの知識と記憶を授けているからこの戦争がどういったもんかお前は分かりきっているはずだぞ。」

「無論のこと承知済みです。ですが一応私は世間的には前皇帝に選ばれたのではなくあくまで奪った立場。故に皇位継承の儀式を受けていない事が真実なのですよ。」

代々の皇帝は皇位継承と共に国父バツシュから転生前の前世の知識と転生後のチート能力の全てが保存された光子結晶とを授かり身に着けることによって皇帝の証とこの国を統べる力と知識を得るのだ。

だがアウグストは皇帝を殺してその地位を奪い、自身の覇権を身内と一族の血を持って塗り固めてきた。

その為皇帝の証たる光子結晶の行方は知れず改めてバツシュ自らが再び光子結晶を作りそれを授けることによって一応の解決を図っているがアウグストは世間的には皇帝では無いとされている。

その認められていないという苦しみが当初のアウグストをして流血皇帝の名と足らしめる残虐な行為の数々へと繋がるのだが、今となつては遙か昔のことである。

「だからこうして色々と臣下を動かし帝国の万が一の事態に備えているのです。何かご不満が御座いますか。」

「うゝん俺としては別にいいんだが、一応この世界の事もあったわけだし今更勝つてもそんなもん直に用済みになるぞ？それでもいいのか。」

バツシュは自分が知っている前世の知識の中からこの世界の未来を知っている。故にこの魔法世界には既に価値は無く今更無駄なことをする必要がないと暗にいつているのだ。

「私はこの戦いで別に利を得ようというわけではありません。私が得たいのは実よりも名。極めて独善的で独裁者に相応しい理由ですよ。」

アウグストは事も無げに自分の古い先短い人生に華を添える為に国民に犠牲を強いる事をいった。

「へえへえ、人間様の考えることはわたしにや分かりませんよ。お前に殺されないくらいの女房がいればよかったんだがまあそれも仕方が無い。」

バツシュは部屋にある夜の街の明かりと月と星の光りが差し込む窓を空けて外の風を部屋に送り込んだ。

「もう行ってしまうんですか。今夜も御婦人の所に行かれるのでしょうか。いやゝ羨ましいですね。」

「けっ、言ってる。あ、そうそうこれだけは覚えておけ。俺はあくまでもこの件に関わるつもりは無い。それと俺の邪魔はするな、以上。」

バッシュは月明かり差し込むバルコニーから飛び降り夜の街の中に消えた。

「相変わらず奔放なお方だ。一応ここは城の百階何だが・・・まあ別にいつか。」

皇帝は何時もの事かと呆れ半分と心の奥底で高祖の自由気ままで奔放な態度に若干の羨望も感じていた。

皇帝アウグスト。

世紀の悪逆暴帝は時代の節目に何を感じるのか？

果たして彼は老いた身でこの世界にどのような風を吹き込むのか？

哀れなさびしい老人の悪あがきが始まろうとしていた。

魔法大戦（後書き）

最初に思っ たんですが、別にオリ主転生者チートつえーでよかった
んではと思っています。

でもそれだとつまらん。話がさくさく進むよりも色々とうだうだ書
いてた方が楽しい。

大分裂戦争（前書き）

この作品は作者の妄想とご都合主義で出来ています。
以上の点に注意して見てください。

大分裂戦争

オスティアを巡る北と南の対立はそのままこの世界に君臨する大同士のそれと同義であつた。

オスティアは魔法世界を創つた始祖が最初に降臨した地でありその地を治める王族はその始祖の血を引き魔法世界にとって最重要地点でもあつた。

元々この世界に産まれた亜人種たちは人間世界から来た人間のことを快くは思つてはいない。

更に自分達のアイデンティティに関わるオスティアが長年の間その人間達によつて支配されていることは彼らの心情をして決して安らかざるものではなかつた。

そして遂にヘラス帝国、メセンブリーナ連合両雄が激突することとなる。

異世界においても人間は争いをやめる事が出来ないことを証明していた。

オスティアを巡り大軍同士がぶつかり、空を翔る船が砲火を交え魔法詠唱の聲が戦場の狂気に負けじと声高に唱えられる。

その様子を戦場から離れた小高い丘の上で見ている者がいた。

身の丈190cmを越える女性が腰に剣を下げ戦場をじっと見据えていた。

その後ろでは天幕を張った軍人たちが忙しく動き目の前で行われている戦闘を詳細な情報と分析を交えて本国へと送っていた。

「フォベリア卿！戦場が南に流れ始めました、じきここも気付かれます。急ぎ陣を移動し監視を続行したいと思いますが。」

天幕の中で情報を分析していた男が外に立つ女性に声をかけ退避を促していた。

「うん。分かった、お前たちは先に行け私はもう少しここで見ている。」

フォベリアは男の顔を見ずにジット戦場のほうを眺めていた。

「フォベリア卿・・・しかし万が一ということもあります。それに貴方様は本来ならばこのような地・・・。」

「言つなよ。」

男の言葉を遮る様にしてやっとフォベリアが戦場から目を離し男の顔を見ていった。

いや、彼女の方が遥かに高いので見下ろした、という表現が正しいのか。兎に角フォベリアは顔に自嘲の笑みを浮かべて言った。

「私は陛下の命でここに来ている。それに私とて”騎士”の端くれ。

「そうそう後れは取らぬ。」

ここでの”騎士”とは一般的に言う騎士のことではなく、高祖から代々受け継がれている超常の力の血を引く者の事である。

寿命は人の倍近くなり、その拳は天を掴みその足は大地を轟かせ一人で万の軍を打ち倒し国さえも滅ぼす事が出来る者達のことである。その余りにも強力な力を持つため代々の皇帝のみが使えるハイブレインの印を埋め込まれ帝国と皇帝に対する絶対無比の忠誠と服従を架せられている。

それゆえ騎士たちは帝国の力と恐怖の象徴としてこの世の中で最高の名誉と装備と快楽を与えられている。

彼女は腰に下げた人の身長程ある長刀の柄を力チャリと鳴らした。

「分かりました。しかしくれぐれも御自愛下さい。貴方様のお体は貴方様一人の者ではないのですから・・・。」

男はそういつと振り返って撤収の準備へと走っていった。

「ふっ。あの男の心配性もいまに始まったことではないが、こう彼はと氣遣われてはこっちも肩が凝ってしまう。」

オスティアを巡る戦いが繰り広げられている中、ここエリジウム大陸とボレアリス海峡でも戦いは起こっていた。

A・D・K・はヘラス帝国、メセンブリーナ連合両国から宣戦を布告され否応なく戦いへと巻き込まれていった。

両者の理由は其々遙か昔の民族問題及び領土問題に起因し

ヘラス帝国は「A・D・K・はそもそも異邦人が建てた国である。本来魔法世界には存在しなかった不要分子が勝手に魔法世界の住民を追い出し奪った地にのうのうとのさばる国を正義の名の下断罪する。」

メセンブリーナは「A・D・K・は魔法世界に対し野心を抱きあまつさえ魔法世界を滅亡させる大量破壊兵器を隠し持ち、これは魔法世界に生きる全ての生命に対する脅威であり我々は世界の安全と平和を守るためA・D・K・を討つ。」

と、勝手なことを述べているが常々両国との関係はこのような感じなので帝国としては何時ものことかと若干の侮蔑を込めて、

「魔法大戦」とこの戦争を呼んだ。

ヘラス帝国は陸上から大魔法騎士団を率いてA・D・K・首都パンデモニウムを目指し進軍を続けていった。

しかし彼らは国境を越えると同時にその目論見は早くも頓挫することとなる。

宣戦布告と共に奇襲を行い首都を一気に制圧するはずであったがしかしA・D・K・が誇る異能者集団パラギルドによってその目論見はとうに知られることとなり、国境に伏せていたA・D・K・ケル

ベラス方面軍と真つ向からぶつかる事となつてしまったのだ。

ケルベラス方面軍はA・D・K・陸の主力として重装備重火力を誇り圧倒的な制圧力で外敵の脅威をこれまで退けてきた。

今回も機動性を重視するあまり軽装になつてしまつた魔法騎士団は重装備を整え分厚い陣を敷く方面軍を突破する事が出来ず国境まで押し返され戦線は膠着。

メセンブリーナ連合もボレアリス海峡を制しA・D・K・の封じ込めを行おうとこの世界では珍しく洋上艦隊を派遣したが、これもA・D・K・第八空中艦隊に粉碎され制海権を失い。

早くもヘラス。A・D・K・両国の圧力の前にジリ貧になつていった。

- パンデモニウム城 -

「全く、やり過ぎだ。これではこれ以上の戦火を望むことすら出来ない。」

アウグスト皇帝は呆れ混じりに報告を持ってきた大臣に言った。

「しかし陛下、これは大勝であります。これで奴らも我ら帝国の力を思い知つたはずです。」

皇帝は大臣の言葉に分かつていないという風に首を振った。

「いいか、私は確かに力を示せといった。しかしなこの程度の勝利で浮かれているようでは何れ足元を見られるのが落ちだぞ。」

どうやら皇帝は満足していないようだ。それもそうだろうこの男は皇帝に伝わる秘術を用いて若さを保ち、常に剣を携え自分の後ろに人を置かない猜疑心と逆賊という汚名を晴らそうと今まで数々の業績を行ってきた。

その男にしてみれば、自分の最後を飾る戦いがこの程度の結果では当然納得するはずもない。

「せめてヘラスを灰にしたり、メガロメセンブリナの元老院を一人残らず処刑するとか、あとオステティアを落すとか……。」

なにやら物騒なことを言っているが何時ものことなので大臣は黙って皇帝の愚痴を聞いていた。

「では陛下。いつその事例の『完全なる世界』の連中を利用しようではありませんenna。」

大臣がこのままでは又皇帝が無茶な命令を出す前に代案を出すことにした。

「『完全なる世界』をか、あやつらが帝国の意に従うと思うか？」

「従わせるのではなく利用するのです。奴らの目的は大規模な戦争を引き起こしそれを長引かせて自身の勢力を拡大。更には始祖の血を得る事が真の目的です。」

帝国が誇るパラギルドはその優れた情報収集能力を遺憾なく発揮し

既に幹部クラスから末端の構成員に至るまで全て調べ上げていた。

その上で大臣は彼らを利用しようというのだ。

「まず此方から接触を行い帝国の邪魔をしない限り相手の活動を国外に限り黙認。その代わり奴らのシンパを使って両国を煽りたて陛下の望む戦場を整えてみせましょう。」

本当にこんな条件で動くかどうかは分からないが、多分これ以外にも色々と策を練っているであろう大臣は自身ありげに言った。

「分かった、良きに計らえ。せめて私の寿命が来るまでに望みが合うことを祈っているよ。」

「御意。お任せ下さい。」

これ以降紅き翼によって『完全なる世界』の姿が暴かれるまで帝国と組織の奇妙な関係は続いた。

- メセンブリーナ連合 メガロメセンブリナ -

メセンブリーナ連合首都の夜を飾る煌びやかな巨大ビル群の中で一際高いこの国の議事堂が置かれているビルの一室で、数人の男たちが互いに顔が分からないように目深のフードを被りなにやら深刻な話をしていた。

「いやはや、ヘラスと共闘してA・D・K・を北と南で挟み撃ちに

するつもりが逆に各個撃破されるとは。今回の損害は馬鹿にはなりませんよ。」

「いやそれよりも今回の我らの策、A・D・K・に掴まれていたのではないか？」

一人の男が相手の手際のよさに疑問を示した。

何故ならば開戦が避けられぬと知った元老院はヘラス帝国宰相と図り両国にとって目障りなA・D・K・をこの機に排除しようと動いた。

無論これも自分達の邪魔をするA・D・K・を封じようと『完全なる世界』が仕組んだことであつたが……。

しかし彼らの目論見は脆くも崩れ去り、逆に帝國の逆鱗に触れた形になってしまった。

「あの国の皇帝は国民には人気があるがその実獣のように血に飢えた男だそうだ。」

「全くかの国は化け物ですな。異邦人どもには何かしらの秘密があるのではないですかな。」

「皆さん話がずれています。本筋に戻りますが今現在連合は非常に不味い状態にあります。」

そういつて部屋の中央に魔法で映し出されたこの世界の地図と戦況が大まかに記されていた。

「現在主力はオスティアに陣を敷きヘラスの侵攻に耐えているが日に日に戦力を増強しつつある中ジリジリと後退しているのが実情だ。」

「それだけではない。先のボレアリス海峡を巡る海戦で連合の大洋艦隊は壊滅。これではグレートブリッジの防衛でさえ覚束無い。」

グレートブリッジは魔法世界最大の建造物であると同時に連合の最重要拠点であった。

海に阻まれたメガロメセンブリナとオスティアを繋ぐ唯一の陸上輸送可能なこの橋は古くから連合の貿易と交通、輸送の中心として連合の繁栄を支えていた。

古代の歴史家の中には「この地を押さえたものがこの世界を思うがままに動かす」という記述もある。

この戦争でも、グレートブリッジはその能力を遺憾なく発揮し、前線を支える補給物資と兵員を送る戦争継続の要であった。

また橋自体も強固な魔法防壁と何十にも張り巡らされた火線、更には常時駐留する空中艦隊と大洋艦隊によって鉄壁の守りを誇っていた。

しかし守りの一角である大洋艦隊が海戦で壊滅し再建には長い年月を必要とし、空中艦隊も前線が逼迫する中次々と戦力を抽出され嘗ての威容を失っていた。

前線が逼迫する中、オスティアだけにかまっていられないのが連合

の実情だ。

「兎に角これ以上の戦争継続の為には国庫の備蓄は足りないな。加盟国には悪いが最悪徴発という形で資金を集めるしかなろう。」

「それと失った兵士を補充する為に徴兵制も視野に入れなければならないな。」

元老院たちは暗澹たる気持ちで議論を進めて言った。

しかし、これといって画期的な手段がない今彼らは暫し苦渋の時を過ごすしかなかった。

- ヘラス帝国 首都ヘラス -

この国の皇帝でありヘラス族の頂点に君臨するヘラス大王は謁見の間で今しがた届けられた不報に眉を顰めていた。

- 我が帝国自慢の魔法騎士団が敗北しあまつさえ逃げ帰るなど。ええい将兵の教育はどうなっておる!!! -

大王は全身に怒気をはらませその気に当てられた謁見の間に集まった者達は、大王の気が静まるまで戦々恐々とし冷や汗を流していた。ようやく大王が怒りを納めしかし目つきは鋭いまま隣に控えている宰相を呼び出した。

「宰相。貴様の策に乗り連合と共闘したがどうだ！！このざまではないか。いったいどう責任を取るつもりだ？」

いまや大王の怒りは周囲にではなく宰相一人に集約されていた。

「今回の不祥事は臣の不徳のなす所。あまんじて処罰を受ける所存であります。しかし・・・。」

「しかし、何だと言った。」

「少なくともこれで我が方に有利な状況になったのも事実です。」

大臣の意外な発言に周囲にいたものたちは驚いたが大王は逆に興味を示し無言で続きを促した。

「今回の敗戦で確かに騎士団は敗北しましたがすぐさま国境まで引き返し殲滅されること事態を回避しています。しかし連合は狭い海峡の中での海戦で愚かにも空中艦隊に挑み思うように撤退できない中壊滅したとの事です。これを見れば一体どちらのほうが被害が大きかったかは一目瞭然です。」

「更に連合は貴重な海洋戦力を喪失し、補給にも支障が出始め連合の要であるグレートブリッジの防衛に綻びが出ています。対して帝国は騎士団の損害もあれ直に増援を送り更に防衛に終始している今、此方から仕掛けない限りA・D・K・は問題ありません。」

つまり宰相の言いたいことは結果的に負けたが連合は自分達以上に疲弊し更に問題のA・D・K・も今すぐには動かないと見ている。

連合の戦力が低下した今一気に兵を進めることをこの男は大王に進

言しているのだ。

「お前の言いたいことは分かった。しかし罰は受けてもらうぞ。」

「はい。謹んでお受けします。」

大王は息を吸い、部屋中に大きく響く声で言った。

「宰相はその権限を凍結し一年間の俸給の返上と領地の兵五千名を軍に差し出せ。及び宰相にはオスティア奪還の軍の指揮を取りその成否いかんによっては処罰は不問とす。以上だ。」

大王は宰相を表向きは処罰する形で、実際は軍の指揮を命じその出来によっては今回の件を流すという形を取った。

王宮中にこのお触れが出回る頃には宰相は帝都を離れ自身の領地で連れて行く兵の編成と帝国軍との調整に走っていた。

大分裂戦争（後書き）

次回あたりヘラスのグレートブリッジ攻略戦です。

グレート＝ブリッジ攻略戦（前書き）

すみません。原作読み直してオスティア戦を入れ忘れたので急遽書き直して入れました。

その時にグレート＝ブリッジ戦のデータを保存せずに新たに書き直したので題名と違って描写は少ないです。

グレートブリッジ攻略戦

ヘラス帝国は宰相が率いる五千の兵を新たに軍に編入し軍の再編成を行い、軍の最高司令官になった宰相はまずオステイアへと兵を向けた。

- メセンブリーネ連合 -

メガロメセンブリアより派遣された軍の司令官は目の前に広がる圧倒的なヘラス帝国の軍の前に顔を青くさせながら防衛の指揮を取っていた。

「クソ。帝国の兵は一体何処から湧いて来ているんだ。こっちは補給さえ厳しいと言っのに。」

愚痴を言いつつも司令官は次々に前線に指示を与えるも、無尽蔵に湧いてくる帝国兵の前に消耗を強いられることとなる。

連合は各地で奮闘しつつも滞る補給と錬度の低い兵では士気も低く各地で防衛ラインを突破されつつあった。

- ヘラス帝国 -

重魔道砲による遠距離攻撃と大規模殲滅魔法とで遂に前線が破られようとしていた。

「フハハハ。見たか連合め！！一気にオスティアを攻略して見せるはあ。第三十三重魔装騎士団前進！！連合の前線をズタズタにしろ！！」

号令と共に帝国軍の騎兵隊は連合のボロボロになった前線を突破蹂躪し兵力、火力共に劣っていた連合は各地で寸断されることとなる。

「よし。敵の前線を突破したな。後方に待機していた歩兵を前に出せ、この機に制圧する。それと空中騎兵を要請しろ。敵の後方に回り込んで殲滅する。」

三十分後、飛来した空中騎兵により退却路を失った連合軍は各地で降伏するか殲滅されるかの二択を強いられ、勢いに乗る帝国はオスティアの眼前まで迫っていた。

・オスティア・

「もう目の前まで迫っているぞ。早く逃げなければ！！」

「チクシヨウ！！メセンブリーナは何をやっている。このままじゃオスティアが墜ちるぞ。」

オスティア王宮内では、眼前に迫った圧倒的なヘラス帝国軍の前に混乱し逃げ惑う人々で満ちていた。

そんな彼らを冷やかに見ている者たちが居た。

「全く何を慌てて居るのやら。我らには黄昏の姫巫女が居るのに何

を恐れる必要がある。」

「ええ、ええ。本当にその通りです。偉大なる始祖の血を引くこのオスティアが不埒な帝国などに後れを取るはずがありません。皆さんもそうお思いでしょう?」

そういつて振り返った男に、集まった者たちは頷いて同意を示しここにいる全員が同じ意見だと言う事が分かった。

「されど油断は禁物ですぞ。幾ら姫巫女であろうと王宮まで乗り込まれては手も脚も出ませんぞ。」

別の男が少し心配そうに言うが、

「ははは、それこそもしもの時は姫巫女を引き渡して勝者の分け前に与るがいいだろう。」

「どちらにしろ、帝国、連合、どちらか勝ったほうに付けばよいのです。さすれば我らも安泰でしょうに・・・。」

混乱する王宮を余所に、自らの保身のみを求める者たちが蠢いていた。

・メセンブリーナ連合・

「司令、このままではオスティアは落ちます。ここは一旦兵を引き再起を図るべきだと愚考します。」

副官の進言に暫く司令官は考えると彼の撤退の指示を出すことを決めた。

「分かった。口惜しいが今は我方に不利だ、がグレートブリッ
ジが連合は再び巻き返せる！！全軍に後退を指示、悟られぬよう撤
退の準備を進める。それと例の志願兵だが・・・。」

司令官は今まで王宮周辺の守りに付かせていた志願兵を前に出すこ
とを決めた。

この志願兵は、魔法世界各地から集まって連合に協力をしている者
達の集まりだが、正規の訓練も受けず連度もばらばらで中にはまだ
十三歳の子供までいるので専ら後方での警備任務に付かされていた。
今回もまた王宮での警備任務など重要度の低い場所に配置されてい
たが司令官は少しでも時間を稼ぐためにありとあらゆる方法を使う
ことにしたのだ。

「司令、お言葉ながらあんな連中では時間稼ぎにもなりますまい。
逆に民間人を置き去りにしたのだといわれれば軍の信用に関わりま
すぞ。」

「いや、そうではない。彼らは自ら志願して前線に出てオスティア
を救うため自らの命を犠牲にするのだ、民衆が好みそうな英雄譚だ
ろう？今は少しでも戦力が欲しいのだ、使えるものは全て使え！！」

司令官の指示に渋々ながら副官は従い志願兵への出撃命令を出した。

だが、この指示は結果として事態を好転させることとなる。

志願兵の極少数のものたちが信じられない戦果叩きだし、辛くもオ
スティア陥落は防がれることとなる。

この日を境に若き英雄たちはまだ誰にも知られること無くその産声を上げることとなる。

・ヘラス帝国・

宰相はオスティア攻略失敗との報を受けてもなんら顔色を変える事無く逆に予定通りだといわんばかりに笑みを浮かべた。

「宰相閣下。例の準備が整いました。何時でもいけるとの事です。」

オスティア陥落失敗を伝えた者と代わる様に別のものが彼が今一番欲しい報告を知らせてきた。

「送り込む兵の錬度は？」

準備は整った、後は実際に動く手足の確認だけだ。

「報告によりますと各戦地から選りすぐり部隊を抽出し訓練は全て終了、最新の装備と機材に習熟させ我が軍最強と言っていていいでしょう。更にご指示の通り各地に欺瞞情報を流しオスティアにメセンブリーナ連合が集中するようにしています。」

報告に満足した宰相は次の指示を伝えた。

「宜しい。では、予定通り作戦を開始すると伝える。」

「了解しました。」

敬礼して部屋を後にした後、宰相は机の引き出しからパイプを取り出し暫しの休息楽しんだ。

「さて、そろそろこの戦争も詰めの段階に入るな。」

パイプを吹かしながら宰相は次の指示を考えていた。

- ヘラス帝国とある辺境 -

戦場から離れ、厳重な警戒の元帝国の趨勢を決めるある重大な作戦が行われようとしていた。

月の光に照らされ広大な荒野に集められた帝国軍はこの日の為に訓練と研鑽を積み、最新の装備と最高の錬度を誇る帝国軍最強の兵として集まった者たちは今までのことを胸中に思い浮かべていた。

一方荒野を離れ、連合の最重要拠点であるグレートブリッジの厳重な警備網を潜り抜けたヘラス帝国軍特殊部隊は潜入してから何日もかけて周到にある準備を行っていた。

そして今夜、彼らの努力が報われようとしていた。

突如として夜のグレートブリッジに出現したヘラス帝国軍に、グ

レート＝ブリッジを守る防衛部隊は狼狽しその混乱を突くように空中艦隊から次々と帝国兵が降下しレート＝ブリッジ各地で激しい戦闘を行った。

しかし、先のオスティア攻略戦以降前線に兵力を集中してしまったメセンブリーナ連合はレート＝ブリッジに僅かな兵力しか残して居らず、切札である空中艦隊も今はオスティアに張り付き今から連絡しても到底間に合うはずが無かった。

空中艦隊からの砲撃支援と、最新型の鬼神兵を要するヘラス帝国の前に内部に入られた防衛部隊は手も脚も出ずに結局夜が明ける頃にはレート＝ブリッジにはヘラス帝国の旗が掲げられレート＝ブリッジは陥落した。

打ち切り

申し訳ございませんが、個人的な都合でこの作品が連載する事が出来なくなりました。

というのも、新しい設定や色々と別に書きたい事が出来てしまつてこれ続ける余裕がなく、大変申し訳ありませんが、打ち切りという形で終わります。

別の作品には力を入れていきますので、もし宜しければこれからも私の作品を読んでいただけたら幸いです。

最後になりましたが、此処までお付き合い頂き真にありがとうございます。

では、またどこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3922q/>

新・二つの世界！？ 目指せ!!オッパ...

2011年8月11日00時40分発行